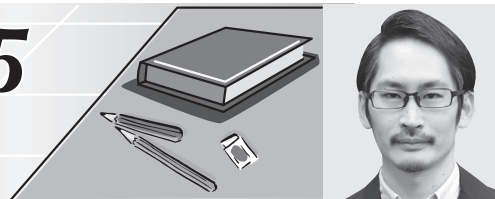


# 学生時代と図書館 105

## 「古いけれど、新しい」

伊多波宗周



賞味期限50年、できれば100年の文章を書きたい。哲学研究者の端くれとして、いつもこのように思っています。多くの人に読まれつづける本を書きたい、というのとは少し違います。半世紀後、一世紀後に、同じ問題関心を抱えた、たった一人の研究者が、わくわくしながら読むようなものを書きたい。そういう願いです。

これまでの研究生活で、受け取る側として、そういう本にいくつか出会ってきました。強く言えば、自分のために書かれたとしか思えないような本との出会いです。もちろん、実際には、私と同じようにわくわくしながらその本を読んだ人がいるのでしょう。けれど、図書館という場所には、この本は自分のことをずっと待っていたのだという感慨を成り立たせる力があるように思います。

古い洋書の多くは、綴じられていて、はじめて読むとき、ペーパーナイフで、いわば封印を解く必要があります。大きな図書館の書庫には、まだ封印の解かれていない本がたくさん眠っています。古いけれど、新しい本。少なくとも、その一冊は、場合によっては一世紀にわたって、誰にも読まれず、ひたすらそこで新しいまま読者を待っていたのです。図書館の人に頼んで、そうした本を目覚めさせるとき、なんとも言えない快樂と緊張を覚えます。

書籍の電子化によって、古い本へのアクセスが随分と便利になりました。歓迎すべきことです。けれど、PDFとなった本からは、かろうじて古さを感じることはできても、「古いけれど新しい」という、あの独特の感触を得ることはできません。少し味気なく思います。

このように書くと、図書館をこよなく愛するアナログ時代の人間が、「古き良き時代」を懐かしんでいるようにみえるかもしれません。たしかに私は、まだ日本国内でOPACが当たり前の

ものとは言えなかった時代をぎりぎり知っている世代に属します。たとえて言えば、その時代(私が高中生だった頃)の図書館は、手書きの地図で歩く森のような場所でした。

他方、私が大学生になった頃、図書館という場所は、新しい時代の到来を最も感じさせてくれる場でもありました。やや強引に、先ほど書いたことと結びつけると、図書館自体が、古いけれど、新しい場所に感じられたのです。

やっとインターネットが家庭に普及し始めていた世紀の変わり目の頃、大学生の私は、自宅で図書館にあるクラシックのCDを検索できることに興奮を覚えていました。ついに未来世界がやってきた、という感覚です。ネット書店も、音楽コンテンツのデータベース化も、まだほとんど実現していない頃の話です。

当時住んでいた東京の世田谷区にはたくさんの区立図書館があり、そこに蔵されるCDをすべてあわせれば、バロックから現代音楽まで、一通りのものが揃っていました。最寄りの図書館に取り寄せてもらうことも可能ですが、はやる気持ちを抑えることができません。せっせと検索して、どこの図書館に目当てのCDがあるかを調べ、そこらじゅうの図書館に自転車で赴き、さまざまな演奏をむさぼるように聴きました。

おそらく、それができたのは、デジタルの新しい地図を手に入れたからだと思います。近年、図書館をめぐり、いくつもの新しい試みが行われています。私自身は、最近、かつてのように訪れなくなりました。けれど、図書館が、古さと新しさとの出会いの場所であって欲しい、より正確に言えば、「古いけれど、新しい」という「けれど」を豊かに含んだ場所でありつづけて欲しい。そう願っています。

いたば むねちか(専任講師・哲学)